

中古漢語の介母と日本呉音

林 史 典

【導言】

日本字音の形成過程で、日本語が中国語との間の音節構造の相違をいかに解消・克服したかという点——より一般的には、言語の借用という事実を通じて、同様の矛盾がどのように解決されるかという点——から見て、中古漢語の介母と日本字音との関係は、やはりたいへん重要かつ興味深い問題の一つである。中国語の介母と韻尾は、日本語が事実上それに相当する構成要素を持たなかったために、現実には多くの問題を生じ、したがってまた、歴史的にもきわめて複雑な情況を生み出しているが、これをひとまず現象面から整理・検討することによって、日本字音の特質を解明する糸口を得ようとするのがここでの狙いである。陽類および入類の韻尾に関してはひとつおりの解釈を試みたことがあるので¹⁾、小論ではもっぱら標題の関係を、平安時代末期以後の法華経読誦音によって考えることにする。就中呉音系の字音を取り上げるのは、dominant な字音として、それが日本字音の最古層を成すという点に加え、当面の問題が、ここに典型的かつ集中的に現れるからである²⁾。

ついでに付言すれば、所謂拗音は、それが顕著な漢語的特徴として現れるところから、依然としてその発生を中国語あるいは漢字音の影響として説明する立場が有力であるように見受けられるけれども³⁾、この場合、影響とは具体的にいかなる事実をさすか、また、それはいかなる範囲に及び得るかといった点が肝要である。このような点への明確な反省を欠くことによって、従来の解釈が、結果的に“影響”という語の持つ意味の曖昧さに寄り掛からざるを得なくなっているとしたら、いかにも皮相的だと言わなければならない。一方、拗音が果して中国語からの“影響”という一方的かつ受動的な方向でのみ発生しているのかどうか、この点も自明とは言えない。中古漢語の介母の、拗音としての定着に、日本語の側からの主体的な選択が働くとしたら、そこにはどのような条件が関与するのか、このような疑問に対しても小論のような角度からの体系的な

把握が不可欠のように思われる。

今回は概括的な整理・検討を優先させたために、事実や解釈の細部には及び得ないが、以下、上記のような視点をふまえた鳥瞰を試みることにする。

【内容】

1. 中古漢語の介母
2. 中古漢語の介母と日本呉音の関係
3. 開口（外転）
4. 開口（内転）
5. 合口（外転）
6. 合口（内転）
7. 総括

1

まず、中古漢語における介母の解釈に関して、小論の立場を簡略に示しておく。

一般に中古漢語の介母は、〈開合〉と〈直拗〉の組み合わせによってとらえることができるが、その際特に問題となるのが〈重紐〉である。これについては、有坂秀世（1937～39）以来さまざまな説が行われており、すでに可能なあらゆる解釈が出つくしている感がある。その主なものを挙げれば次のごとくであるが⁴⁾、

1. 介母の差とする説

有坂秀世「カールグレン氏の拗音説を評す」（1937～39）

河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」（1939）

陸志章「古音説略」（1947）

2. 主母音の差とする説

董同龢「広韻重紐試釈」（1948）

周法高「広韻重紐的研究」（1948）

3. 頭子音の差とする説

三根谷徹「韻鏡の三・四等について」（1953）

いま、介母に口蓋的（前舌的）介母 $-i-$ と非口蓋的（中舌的）介母 $-j-$ の別を立てる有坂・河野の説に従い、河野に倣って前者を〈三等甲〉、後者を〈三等乙〉と

すれば、中古漢語における介母の体系は次のように整理される⁵⁾。

開合	直拗	直音	拗音	
			甲	乙
開	口	- <u>ŋ</u> -	- <u>i̇</u> -	- <u>ị̇</u> -
合	口	- <u>u</u> -	- <u>i̇</u> ^w -	- <u>ị̇</u> ^w -

なお、〈開合〉以下〈内転外転〉等の解釈についても、原則として河野『朝鮮漢字音の研究』(1964~67)に依るものとする。

2

さて、日本字音は今日、原音の介母を・j・の有無、すなわち構造上は・ŋ・、・j・二つの型で受け止めている(・j・は開拗音に現れる glide)。このかぎりでは単純化が著しいと言えるが、しかし、歴史的なあり方を見るとそれほど簡単ではない。例えば、原音の・i̇・、・ị̇・は比較的これを保存し易かったのに対し、合口的な要素・u・、^w・は、主母音が u になる場合や牙喉音字に一旦保存されながら、牙喉音字の合拗音は、一部の方言を除いて今日全く失われている。その差は、とどのつまり日本語音の体系的特徴に起因すると言うべきであろう。日本字音における開・合二つの拗音の発生に関して、古い擬声語・擬態語や民衆の生の発音の中にその下地を見出そうとする見方もあり得るが、そうした、文献に現れにくい——したがって具体性の乏しい根拠にもとづいた推論は、言うならば沈黙からの論証(argumentum ex silentio)。それだけでなく、合拗音が最終的に何故消滅してしまうのか、この見方からは説明が難しい。開拗音の場合は、口蓋化された子音の存在がその定着を容易にしたであろうけれども、合拗音については、もともとそれを定着させる条件——開拗音に平行して言えば、唇音化された子音の存在——に欠けていたというのが、わかり易い見方ではなからうか⁶⁾。

ところで、原音との関係はさらに厄介である。有坂・河野の指摘にあるように、日本呉音で・ị̇・が失われるのは朝鮮字音と一致した特徴であるが、それも完全に規則的ではない。例えば、遇攝の魚韻では、

魚ギョ 初ショ 疏ショ 所ショ 助ジョ (v. 疎ソ 楚ソ)

などが -i̥- を保存している（「魚」には観智院本『類聚名義抄』に「コウ」の例があり、「ギョ」は漢音形に一致する）。このように、-i̥- を拗音として保存する例は歯音に著しい。深根の、

今コム 金コム 音オム 品ホム 邑オフ

などに対する

琴キム 禽キム 禁キム 及キフ 急キフ

のような例も、-i̥- の特徴が主母音に保存されたものと認められよう。注目すべきは遇（魚韻）・宕摂の

初ショ 所ショ 莊シャウ 装シャウ 牀シャウ 壯シャウ

などで、逆に漢音系の文献において、

初ソ 所ソ 莊サウ 装サウ

のように -i̥- が失われている。一般に正齒二等字が漢音系字音で拗音を出さないのは、有坂の指摘するように⁷⁾、母体となった原音において -i̥- が cerebral の頭子音に吸収される傾向を有したためらしい（呉音系字音の「疎ソ」「楚ソ」などもその傾向を反映するものであろうか）。

一方、日本呉音で甲類の -i̥- が失われる場合も少なくない。通・宕・曾摂の

足ソク 続ソク 六ロク 陸ロク 相サウ 像ザウ 良ラウ

息ソク 即ソク

や、遇・流摂の

鼠ソ 疽ソ 流ル 留ル

などはその例である。

原音における介母の合口性が、拗音として受け入れられるためには、次の二つの条件を必要とした。

(1) 先行の子音が、原音の牙喉音に相当する奥寄り（軟口蓋）の破裂音であること。

(2) 後続の母音が、非後舌母音 (i, e, a) であること。

このことは、合拗音の発生が日本語の音声的環境に強く支配されることを示している。サ行やタ行の合拗音が歴史的にきわめて不安定であったのは、詮ずるところ歯茎や硬口蓋の子音が、前寄りの調音であるという点において、唇音性介母との間のきわだたしさを欠いたからであろう。同様に考えるなら、第二の条件についてもそれなりの理解が可能である。就中 kwa, gwa の pattern が比較的安定を保ったのは、どうやら {奥}-{前/狭}-{広} という対立の、そ

合 口

M(v) \ I	唇	舌	牙	齒	喉	半舌	半齒
I	-ŋ-	-ŋ-, (ui)	-w-, -ŋ-	-ŋ-, (-j-)	-w-, -ŋ-	-ŋ-	
II	-ŋ-		-w-		-w-, -wj-		
III		-j-, i, ui, -ŋ-				-j-, i, ui, -ŋ-	
III _甲			-w-, -wj-, j, i	-j-, i, ui, -ŋ-	-wj-, j, i, -ŋ-		-j-, i, -ŋ-
III _乙			-w-, j, i, -ŋ-	-j-, i, ui, -ŋ-	-w-, -wj-, i, -ŋ-		
III _f	-ŋ-						
IV			-w-, -ŋ-		-w-, -wj-		

(注)

- i) IIIはIII_甲相当。III_fはIII_乙相当。
 ii) 各欄における -j-, i-, -ŋ-等の順序は、該当区分内での優勢度を示す。
 iii) -ŋ-は介母の特徴が存在しないことを、-j-, -w- はそれぞれ開拗音、合拗音（ワ行の仮名で表されるかたちを含む）を、-wj- は「クキヤウ」のように表されるかたちを、また i, u, uiなどは介母の特徴が保存されていると認められる母音を示す。

3

次に、上の表にもとづいて問題となる諸点を考察する。

〔開口（外転）〕

I まず、一等韻には問題が少ない。ただ、次のような歯頭音だけが例外で、拗音が現れる。

果摂 蹉シャ 娑シャ (v. 左サ 作サ)

宕摂 錯シャク 鑿シャク (v. 倉サウ 桑サウ)

これらに関してとられやすい解釈の一つは声符による類推であるが、それにしてはこのような例が歯音に集中する点が問題である（「鑿」にいたっては類推として説明することさえ容易でないであろう）。また、同じ一等韻の他攝（蟹・效・咸・山）に同様の例が見出し難いことにも注意しなければならない。類推の可能性は否定できないまでも、このような場合、頭子音・主母音・韻尾との関係——すなわち、その音声的環境や条件——をも考慮しなければならないのは当然である。一方、中古漢語の ts- 系、tʂ- 系を分出させたのは上古音の ts- 系、t- 系であって、直接には上古音との関連も考え難い。ちなみに、中期以後の朝鮮字音⁸⁾は「蹉 c'a」「娑 sa」「錯 c'ak」「鑿 c'ak」のごとくで、三等韻と現れ方を異にする。

II 二等韻においても歯音は問題で、果(仮)攝では一般に拗音が現れる。

仮攝 差シャ 叉シャ 沙シャ 灑シャ (v. 把ハ 吒タ 加カ)
これに対して蟹・效・咸・山攝の歯音は、v = a の場合も、「爪サウ」のように拗音を出すことがない（朝鮮字音は「差 c'a」「叉 c'a」「沙 sa」「灑 sa」で、やはり三等韻と現れ方が異なる）。

歯音のほかにも梗攝と宕(江)攝に拗音があるが、両者はたいへん対照的である。すなわち、梗攝に拗音が多いのに対し、江攝にはそれが少ない。

梗攝(唇) 百ヒャク 白ヒャク 猛ミャウ (v. 迫ハク 陌ハク 珀ハク
盲マウ 萌マウ)
(舌) 坼チャク 擇チャク (v. 宅タク 沢タク)
(牙喉) 更キャウ 坑キャウ 行ギャウ 莖キャウ 客キャク
厄ヤク (v. 幸カウ 額カク)
(齒) 争シャウ 諍シャウ 責シャク
江攝(唇) 藐ミャク (v. 爆ハク 雹ハク 撲ボク)
(舌) 濁チョク (v. 幢ドウ)
(牙喉) —— (v. 江ガウ 降ガウ 講カウ 巷カウ 覺カク
角カク 業ガク 学ガク)
(齒) 捉シャク (v. 窓ソウ)

このような傾向は、日本呉音におけるほど顕著でないものの、朝鮮字音にも認められる。後に述べるように、梗攝の palatal な特徴を反映するものであろう。

以上のように、外転の開口では、一・二等を通じて次のような各条件下に拗音が現れる点が注目される。

i) (I = 歯音)

ii) V = a

iii) F = -ŋ、-ŋ' ~ -k'、-k

なお、次の二字は声符からの類推と認められる。

佳クエ（蟹摂、開口、見母二等）

叔シャ（蟹摂、開口、徹母二等）

Ⅲ～Ⅳ 三等の甲・乙とその相当韻、および四等（四等専属韻）では、蟹・效・咸・山の各摂に拗音が存在しない。蛇足ながら、その例を挙げる。

蟹摂 Ⅲ_甲(Ⅲ) 蔽ヘイ 弊ヘイ 裔エイ 世セ 制セイ 勢セイ

誓セイ 際サイ……

Ⅲ_乙 偈ケ

Ⅳ 迷メイ 閉ヘイ 米マイ 弟デ 低テイ 帝タイ

提ダイ 礼ライ 戻ライ 計ケ 稽ケ 繫ケ 谿ケイ

啓ケイ 齊セイ 西サイ 妻サイ……

效摂 Ⅲ_甲(Ⅲ) 瓢ヘウ 妙メウ 眇メウ 超テウ 潮テウ 療レウ

要エウ 揺エウ 消セウ 小セウ 照セウ 焼セウ 饒ネウ……

Ⅲ_乙 表ヘウ 苗メウ 廟メウ 橋ケウ

Ⅳ 漂ヘウ 調テウ 彫テウ 了レウ 尿ネウ 曉ケウ

臬ケウ 蕭セウ……

咸摂 Ⅲ_甲(Ⅲ) 塩エム 厭エム 焰エム 漸ゼム 瞻セム 苦セム

輒テフ 狷レフ 葉エフ・セフ 接セフ 摂セフ……

Ⅲ_乙(Ⅲ_乙) 險ケム 檢ケム 凡ボム 犯ボム 梵ボム 嚴ゴム

法ホフ 乏ホフ 劫コフ 業ゴフ……

Ⅳ 念ネム 点テム 兼ケム 嫌ケム 謙ケム 氈テフ……

山摂 Ⅲ_甲(Ⅲ) 遍ヘン 便ベン 面メン 展テン 連レン 延エン

演エン 遣ケン 仙セン 鮮セン 浅セン 戦セン 禅ゼン

然ネン 滅メチ 列レチ 裂レチ 折セチ 舌ゼチ 設セチ

熱ネチ……

Ⅲ_乙 変ヘン 辨ベン 辯ベン 免メン 勉メン 乾ケン

寰ケン 言ゴン 建コン 健ゴン 献ゴン 別ベチ 竭カチ……

Ⅳ 天テン 田テン 電デン 蓮レン 練レン 見ケン

堅ケン 現ゲン 宴エン 煙エン 千セン 前ゼン 先ゼン

鉄テチ 涅ネチ 結ケチ……

かくて、これらの四摂は次のような母音を現す。

	I	II	III _甲 (III)	III _乙 (III ₁)	IV
蟹摂	-e	-e	-e	-e	-e
	-ai	-ai	-ei		-ai -ei
效摂	-a(-o-)	-e(-a-)	-e	-e	-e
咸摂	-a(-o-)	-e(-a-)	-e	-e -o	-e
山摂	-a	-e(-a-)	-e(-a-)	-e(-a-, -o-) -o(-a-, -e)	-e

勿論、介母 $-i$ 、 $-i$ は母音 e に吸収されていると考えなければならない。ただ、朝鮮字音はこれらの四摂においても、原則として、三等甲（效摂については乙の場合も）および四等に y を保存している。

蟹摂 (- $y\text{ə}$ -) 效 (- yo -) 咸 (- $y\text{ə}$ -) 山摂 (- $y\text{ə}$ -)

一般に日本字音が、臻摂の合口を除いて、前寄りの韻尾 (- i 、 $-m$ 、 $-p$ 、 $-n$ 、 $-t$) の前で拗音を出さないのは、前舌的の介母とこれらの韻尾の間に立つ主母音が、まさにそのような環境において、前舌の e や i として聞きとられたためである。

二等韻と同様、梗摂と宕摂の関係はきわめて対照的である。すなわち、梗摂では三等甲、乙、四等のちがいを問わず原則として拗音を出すのに対し、宕摂では、乙はもとより甲においてさえ歯音や半舌音で拗音を落す場合がある。

梗摂 III_甲(III) 名ミャウ 并ビャウ 貞チャウ 領リャウ 輕キャウ

頸キャウ 瓔ヤウ 清シャウ 精シャウ 声シャウ 正シャウ
聖シャウ 成ジャウ 静ジャウ 城ジャウ 益ヤク 石シャク
昔シャク……

III_乙 平ヒャウ 病ビャウ 明ミャウ 命ミャウ 敬キャウ
驚キャウ 慶キャウ 競キャウ 逆ギャク 劇ギャク…… (V. 迎カウ)

IV 冥ミャウ 並ビャウ 打チャウ 頂チャウ 定チャウ
令リャウ 靈リャウ 寧ニャウ 經キャウ 形ギャウ 刑ギャウ
青シャウ 星シャウ 笛チャク 歴リャク 撃ギャク……

宕摂 III_甲(III) 長チャウ 張チャウ 場チャウ 涼リャウ 両リャウ

羊ヤウ 養ヤウ 傷シャウ 商シャウ 尚シャウ 常ジャウ
着チャク 略リャク 脚キャク 若ニャク…… (V. 良ラウ 娘ラウ)

相 サウ 想 サウ 象 ザウ 像 ザウ……)

Ⅲ_乙(Ⅲ_レ) —— (v. 方 ハウ(ホウ) 放 ハウ 房 バウ 坊 バウ

忘 マウ 望 マウ 網 マウ 香 カウ 向 カウ 響 カウ 強 カウ

仰 ガウ 央 アウ……)

有坂は、朝鮮字音および日本呉音で庚・梗・敬韻の三等が拗音になる点を指摘しながら⁹⁾、同じ梗攝の二等韻に注意されなかった。これは、もっぱら口蓋的介母 \dot{i} と非口蓋的介母 \dot{i} の差を問題にされたからであるが、梗攝三等の特徴が二等韻に及んでいる点に着目するなら、梗攝は全体としてかなり顕著な前舌性を有していたものと見なければならぬ。朝鮮字音や日本字音で介母 \dot{i} と \dot{i} の区別が明らかでないのも、そのためである。

このような梗攝の特徴は、漢音系字音における韻尾のとらえ方にもよく保存されている。すなわち、韻尾の喉内鼻音がその鼻音性を失って \dot{i} になる例は、

平ヘイ 明メイ 京ケイ 嬰エイ 清セイ 成セイ 領レイ
経ケイ 定テイ 寧ネイ……

のようにいずれも梗攝の、主として三・四等であって、宕(江)・通攝は勿論、曾攝にも同様の例がない。入声も同じで、梗攝の、主として三・四等のみが前舌の母音 \dot{i} を付着させて「一キ」型になる。

劇ケキ 壁ヘキ 易エキ 石セキ 席セキ 績セキ 敵テキ
笛テキ 歴レキ 責セキ……

漢音系字音と呉音系字音とでは現れ方が異なるが、どちらも梗攝の特徴をたいへんきれいに保存している。

入声に関して言えば、呉音系の字音で「一キ」型をとるのはむしろ曾攝(三等)の方である点が注意される。

Ⅲ_甲 直ヂキ カリキ 式シキ 識シキ 飾シキ 食ジキ……
Ⅲ_乙 色シキ 測シキ……

ただ、陽類に漢音系字音のような梗攝との相違がない。また、上で見たように、直・拗の対立において、梗攝との間にきわだたいしい差が存在する。

果(仮)攝には、三等甲・乙の差がはっきり残されている。

Ⅲ_甲 若ニャ・ニャク 野ヤ 夜ヤ 車シャ 者シャ 斜シャ
邪ジャ……

Ⅲ_乙 —— (v. 迦カ 伽カ 佉カ)

4

〔開口（内転）〕

内転とするものには、原則として二等および四等の専属韻が存在しない(幽・黝・幼韻だけが例外)。したがって一等と三等だけを有する。また、内転の諸韻は、日本字音で *o*、*u*、*i* (稀に *e*) の母音を持つのを特色とする。すなわち、外転のような広母音 *a* を含まない (これに対して、*i*、*u* のような狭母音を出さないのが外転の特徴である)。

I 内転の一等韻はすべて直音で、介母との関係に関するかぎりほとんど問題がない。次の諸字は母音の出し方を他と異にするが、

V

流撮	-o、-u	厚カウ	鎌チウ
曾撮	-o	恒ガウ	

これらについては諸家の解釈を含めて別に考察する¹⁰⁾。

III 流撮ではまず、歯音が甲・乙の別を問わずすべて拗音のかたちをとる点が注目される。

III_甲 手シュ 首シュ 守シュ 修シュ 周シュ 酒シュ 取シュ
受ジュ 授ジュ 就ジュ……

III_乙 愁シュ 皺シュ 瘦シュ……

一方、半舌音は逆に介母 *i* を保存しない。

III 流ル 留ル

これらの点を除けば、流撮の場合も甲・乙の差は明らかである。

III_甲 昼チウ 稠チウ 柎チウ 柔ニウ 由ユ 油ユ 遊ユ 誘ユ……

III_乙(III₁) —— (v. 不フ 富フ 浮フ 牟ム 久ク 丘ク 休ク
救ク 究ク 求ク 有ウ 友ウ 右ウ 優ウ *牛ゴ
……)

なお、幽・黝・幼韻は效撮と同じ「エウ」型をとる。

韻尾の違いを無視すると、深・臻撮は現れ方がよく似ている。すなわち、III_甲(III)が母音 *i* を出すのに対して、III_乙には母音を *i* とする場合と *o* とする場合がある。

深撮	III _甲 (III)	沈ヂム	賃ニム	林リム	臨リム	婦イム	心シム
		侵シム	深ジム	甚ジム	任ニム	集シフ	習シフ
							入ニフ
							十ジフ……

	III _乙	琴キム	禽キム	禁キム	及キフ	急キフ	給キフ……
	(v. 品ホム	粟ホム	今コム	金コム	音オム	飲オム	邑オフ
	……)						
臻撮	III _甲 (III)	賓ヒン	民ミン	珍チン	陳チン	忍ニン	隣リン
		緊ケン	因イン	身シン	新シン	人ニン	必ヒチ
		吉キチ	質シチ	日ニチ……			蜜ミチ
	III _乙	貧ビン	愍ミン	筆ヒチ	密ミチ	瑟シチ……	(v. 銀ゴン
		勤ゴン	近ゴン	欣ゴン	乞コチ……)		

唇音における相違(深撮 o : 臻撮 i)は、主母音のちがい(ə : e)に対応するものであろう。

曾撮はやや複雑で、次のような現れ方をする。

	III _甲 (III)	-j-	陵リョウ	称ショウ	勝ショウ	昇ショウ	証ショウ
			乗ジョウ	承ジョウ	勅チョク……		
		-i-	直チキ	力リキ	式シキ	識シキ	飾シキ
			食ジキ……				
		-o-	即ソク	息ソク			
	III _乙	-i-	色シキ	測シキ	*逼ヒチ		
			億オク	憶オク……			
		-o-	矜コウ	興コウ	応オウ	側ソク	棘コク
						極ゴク	

まず、母音 -i- を出すのは入声の舌音・半舌音と歯音だけで、この場合に限って韻尾が「-キ」型をとる。結果的に言えば、coronal な子音が前舌の狭母音をとることにより、それとの関連で韻尾 -k' の口蓋性が保存されたものと見られる。これに対して、牙・喉音(乙)の入声は -oku のような奥寄りの調和を有する。

このような傾向に矛盾するのがやはり歯音で、「即」「息」「側」、および舌上の「勅」が -oku 型をとる理由は説明できない¹¹⁾。入声以外は、曾撮も甲・乙の対立(-jou : -ou)が明確である。

止撮は母音を i で現すために、拗音が存在しない。ただ、諸家の指摘されるように¹²⁾、支・脂(乙)・微(乙)韻に e、之(乙)韻に o を示すものがあるのは、この四韻が合流する以前のある状態を反映するものであろう。

支韻	III _甲	施セ	是ゼ			
	III _乙	戲ケ				
脂韻	III _乙	飢ケ				
之韻	III _乙	己コ	其ゴ	欺ゴ		
微韻	III _乙	希ケ	悒ケ	気ケ	衣エ	依エ

日本呉音で、牙・喉音字が特に甲・乙の対立に敏感であったとすれば、ここでも齒音（「施」「是」）が対応を乱している点が注目される。

5

開・合に関しては、『韻鏡』の開合や日本字音における現れ方にこだわらず、唇音性介母の想定されているものを合口、それ以外を開口とした。例えば、内転の遇・通撮などは開口と同様の現れ方をするが、小論では合口に含めてある。

〔合口（外転）〕

I 外転の合口字は、一等～四等を通じて牙・喉音字に合口的特徴が残る。一等韻について言えば、

火クワ 果クワ 過クワ 梅クエ 外クエ 会エ 観クワン
官クワン 活クワチ 光クワウ 広クワウ 黄クワウ……

のように。もっとも、「外ゲ」（『法華経音訓』）のように、文献によって古くから散発的に直音に混じた例があることは注意すべきである。

既述のように、蟹撮の

堆ツイ 内メイ

などは、何らかの理由で原音の合口性が保存されたものであろう。調査範囲にはないが、「対ツイ」も同じである。これらの例について沼本克明は¹³⁾、坂井健一¹⁴⁾の挙げた『經典釈文』中の諸家音注における、蟹撮合口と止撮合口の相通例にもとづいて、

我が呉音の祖系音が六朝期のある方言音に在ったことを予想させるものと考えらる。

とされたが、沼本自身が述べるように、依拠した相通例中に舌音字が含まれないのみならず、日本呉音の蟹撮唇・齒・牙・喉音字に同様の例——合口性を保存する例——が見えないのは問題で、こうした点が説明されない以上、ただちにこれを上のような結論に結びつけるのは安易である（だからと言って、勿論沼本の結論そのものを直接否定するものではない）¹⁵⁾。

次の例は声符からの類推であろう。

果撮 莎シヤ

II 二等韻に関しては、梗撮（耕韻）に「獲グキヤク」の例が見えることのほか、特別言及すべき点がない。

III～IV 梗撮と宕撮の違いは、合口においても著しい。梗撮（牙・喉音字）が

三等～四等を通じて「キヤウ」「クキヤウ」となるのに対して、宕攝の喉音字(乙)は ㄨ を失い、「ワウ」のかたちをとる。

梗攝 III _甲	傾クキヤウ	頃クキヤウ	營キヤウ
III _乙	永キヤウ	詠キヤウ	榮キヤウ
IV	迥クキヤウ		
宕攝 III _乙	王ワウ	往ワウ	(v. 況クキヤウ)

宕攝の牙音「狂ワウ」「誑ワウ」は呉音系字音の慣用であり、類推音と考えられるが、これも上記のような差異と無関係ではない¹⁶⁾。

先に見たように、山攝は母音の現れ方が複雑であるが、その差にかかわらず、牙・喉音字には合口的特徴が保存される。

山攝 III _甲	缺クエチ				
III _乙	遠ヲン	園ヲン	怨ヲン	越ヲチ……	
	卷クワン	勸クワン	願グワン	月グワチ……	
	円エン	眷クエン	倦クエン	原グエン……	
IV	懸グエン	鑿クエン	銜クエン	決クエチ	穴クエチ
	血クエチ……				

「権ゴン」に合口性が失われるのは、この韻の古い特徴を反映し、母音を o としているためである。

蟹攝では、

銳エイ	以逝反 (『法華経音』、東大本・天福本も同じ)
桂ケイ	去聲反 (同上)

が合口性を失っている。このうち「桂」は四等專屬韻で、有坂の言う唇・牙・喉音四等字における「合口性の弱化傾向」に関係があるかも知れない¹⁷⁾。ただ、一般に呉音系の字音で(-)weiのかたちが存在しない(漢音系字音には「衛エイ」「惠ケイ」などの例があること、言を俟たない)のは、合口性の保存に、介母や主母音だけでなく、韻尾が関与したためである可能性もある。

6

〔合口(内転)〕

I 内転合口で一等韻を有する遇・通・臻・曾攝はそれぞれ次のような母音を有し、

	遇	通	臻	曾
I	-o, -u	-o-, -u-, -ü,	-o-, -u-	-o-, -ü, -a-

曾摂(匣母)の

或ワク 惑ワク

にのみ w が現れる。その他、

遇摂 布フ 普フ 怖フ 部フ 歩フ 塗ツ 奴ヌ 烏ウ

苦ク 鼓ク……

通摂 夢ム 蒙ム 蓬フ 功ク 孔ク 通ツウ 痛ツウ

空クウ……

臻摂 村ジュン 村ジュン……

曾摂 弘グ

などの -u、-ü にも合口性介母の影響があるかも知れない(三等韻も同じ)。

通摂の次の二字は拗音を示す。

通摂 豊リョウ(東韻) 宗シュウ(冬韻)

このうち「豊」は、『法華経音訓』に「レウ」とする。声符「龍」(鍾韻三等)は、呉音形「リウ」、漢音形「リョウ」と認められるから、「豊リョウ」はこの漢音形による類推であろう¹⁸⁾。「宗」に関しては、調査範囲に同じ冬(宋)韻・精母の例が見えないが、東(董・送)韻の精母「總ソウ」(『法華経音訓』)、その他の通摂歯頭音も「ソウ」のかたちが普通であって、「宗」を「シュウ」とする理由をはっきりしない。いずれにしても、一等韻に拗音が現れる条件は開口(外転)の場合にほとんど同じである。

III 日本字音における遇摂の現れ方は開口的であって、呉音系の字音では三等甲およびその相当韻に介母 -i- の特徴が見られるのに対し、三等乙では -i- の特徴を失う傾向が著しい。

III_甲(III) 兪ユ 論ユ 與ユ 主シュ 取シュ 殊シュ 趣シュ
……

柱チウ(注チウ) 住チウ 乳ニウ……

III_乙(III_乙) 数シュ (v. 付フ 父フ 敷フ 無ム 務ム 雨ウ
于ウ 句ク 俱ク 具グ 遇グ 愚グ……)

前に触れた魚韻の場合は少し複雑で、歯音、半舌音が対応を乱している。

III_甲(III) 猪チョ 除チョ 女ニョ 慮リョ 與ヨ 餘ヨ 書ショ
諸ショ 處ショ 序ジョ 如ニョ 汝ニョ…… (v. 驢ロ 疽ソ
鼠ソ……)

Ⅲ_乙 (魚キョ) 初シヨ 所シヨ 疏シヨ 助ジヨ 詛ノヨ……
 (v. 去コ 居コ 語ゴ 御ゴ 虚コ 於オ 疎ソ
 楚ソ……)

通摂の状態も遇摂に近いが、東韻では齒音、半舌音のほか乙の入声に統一性を欠く例がある。

Ⅲ_甲(Ⅲ) 終ジュウ 充ジュウ 衆シュ・シウ 宿シユク 熟ジュク……
 中チウ 蟲チウ 竹チク 畜チク 逐チク 肉ニク
 育イク 夙シク 叔シク…… (v. 六ロク 陸ロク)

Ⅲ_乙(Ⅲ_f) 縮シユク / 掬キク 郁イク 閔シク (v. 風フウ 諷フウ
 豊ブ 福フク 伏ブク 覆フ・フク 雄オウ 宮クウ 躬グウ
 (グ) 窮グウ(グ))

鍾韻でも齒音、入声に問題が多い。

Ⅲ_甲(Ⅲ) 勇ユ 踊ユ 種シュウ 鍾シュ・シウ 従ジュウ 縦ジュウ
 誦ジュウ 頌ジュウ……
 龍リウ 重ヂウ 尊ニク 褥ニク……
 容ヨウ 用ヨウ 悚ショウ 欲ヨク 浴ヨク…… (v. 足ソク
 触ソク 統ソク 俗ソク 嘱ソク……)

Ⅲ_乙(Ⅲ_f) — (v. 奉ブ 峯ブ 恐ク 供ク 凶ク 恭ク
 兇ク 共グ……)
 — (v. 擁ヲウ 癩ヲウ)

漢音系字音のような「恭クキョウ」「凶クキョウ」のかたちは存在しない。

呉音系字音の臻撮合口は、漢音系字音にくらべるとずっと単純で、甲・乙の差も明らかである。

Ⅲ_甲(Ⅲ) 旬ジュン 純ジュン 淳ジュン 順ジュン 出シュツ……
 唇シン 潤ニン 輪リン 倫リン 律リチ……

Ⅲ_乙(諄) 率ソツ

(文) 分フン 紛フン 奮フン 君クン 訓クン 薰クン 軍グン
 群グン 雲ウン 屈クツ 仏ブツ……
 文モン 聞モン 問モン 弗ホチ 勿モチ 物モチ……

開口の母音 i、o (甲 = i、乙 = o、i) に対する合口の母音 u は介母の影響であろう。

止摂の開口が部分的に支・脂・之・微韻合流以前の状態を反映していると考えられたのに対し、合口には同様の例が見えない。そして、甲・乙の別を問わ

ず、-ui, jui, (-)wi のかたちで -i^w-、-j^w- の特徴を保存している。

支韻	III _甲 (III)	羸 _イ	累 _イ	吹 _{スイ}	垂 _{スイ}	睡 _{スイ}	隨 _{スイ}
		髓 _{ズイ}	瑞 _{ズイ} ……				
		窺 _キ	恚 _イ				
	III _乙	危 _{クキ}	偽 _{グキ}	為 _キ	委 _キ	萎 _キ	毀 _{クキ} ……
脂韻	III _甲 (III)	追 _{ツイ}	椎 _{ツイ}	水 _{スイ}	誰 _{スイ}	推 _{スイ}	出 _{スイ}
		遂 _{ズイ}	醉 _{ズイ} ……				
		唯 _{ユイ}	維 _{ユイ}	惟 _{ユイ}			
	III _乙	衰 _{スイ}					
		龜 _{クキ}	匱 _{クキ}	位 _キ ……			
微韻	III _乙	帰 _{クキ}	鬼 _{クキ}	貴 _{クキ}	卉 _{クキ}	威 _キ	韋 _キ 違 _キ
		謂 _キ	畏 _キ ……				

このうち、影母および于・以母の「ユイ」「キ」は甲・乙の違いに対応する。また、支韻三等甲の「窺」「恚」は、有坂によって指摘された合口性の弱化を示す例である¹⁷⁾。

7

つとに言及のある点を含めて、中古漢語の介母と日本呉音との関係を概観した。最初に断ったように、小論は現象面での整理・検討を目的としたものであって、勿論それ以上のものではない。細部的な事実の確認や現象の解釈はおおむね将来の課題である。しかし、以上からもいくつかの重要な点が確認され、また明らかになった。

その一つは、何と言っても、有坂によって解明された口蓋的な-i^h-と非口蓋的な-i^h-の違いが比較的忠実に反映されている点である。例えば、果摂・遇摂・臻摂など。流・曾・通・宕の各摂も歯音・半舌音・入声を除けばその差がさらに明確になる（もっとも、合口では、遇・通・臻の各摂を除いて明らかでない）。

有坂はこれを朝鮮字音の影響と考えられ¹⁹⁾、河野は濁紐の写し方に関連して朝鮮字音との関連にいつそう慎重な姿勢をとられるが²⁰⁾、介母の問題に限っても、細部的には両者の齟齬がかえって目につく。所詮中期以後の新しい朝鮮字音から日本呉音との関係を正確に推定するのは困難である。

上記の諸摂に対して、梗摂はこの-i^h-と-i^h-の違いを反映しない。二等韻を含めて、梗摂がかなり強い口蓋性を有したためと思われる。

歯音は最も難解である。一・二等で拗音を出す例がある反面、三等甲で拗音を失い、逆にまた三等乙で拗音をとるといった例が目立つ。そうした全体を眺めると、「相ッウ」のような例だけを“直音化”として片付けてしまう一部の行き方には大きな疑問が生ずる。

介母の受け止め方に関して、韻尾との関係に着目することもまた必要である。一般に呉音系字音や漢音系の字音で、韻尾 -i、-m~p、-n~t の前に開拗音を存在させにくいのは、介母や主母音の性質によるだけでなく、韻尾の影響があるからであろう。梗攝の口蓋性に関しては、漢音系字音における梗攝韻尾の現れ方に注目することも必要である。曾摂や通摂においても、入声字が甲・乙の対照を乱している。日本語音のあり方を考える場合も、音節の構造を分析的にのみとらえることが危険であることは言うまでもない。

その他挙げるべき点は多いが、省略に従う。

〈注〉

- 1) 「呉音のかな表記における舌内および喉内入声音のかきわけについて」(千葉大学教育学部研究紀要第23巻、1974)、「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」(『国語学』第122輯、1980)、および『日本語の世界4』第5章(中央公論社刊、1982)
- 2) 漢音系の字音に関しては沼本克明「重紐論と日本漢音」(『国文学攷』第51号、1969)などの論があるが、小論とは、考察の目的・方法・範囲を同じくしない。
- 3) いま、先行の諸説をいちいち掲げることは避けるが、例えば『国語学辞典』(東京堂、1955)、『国語学研究事典』(明治書院、1977)などの「拗音」の項はこの立場。また、昭和四十七年(1972)国語学会春季大会の分科討論会「漢字音と国語音」にも同じ方向での発言がある。拗音の成立を漢字音との関連で説明する立場は依然として根強いと見てよいであろう。
- 4) 諸説については、頼性勤(『中国語学』第27号1949、『万葉集大成』第11巻1955)などに解説がある。
- 5) 河野六郎『朝鮮漢字音の研究』(1964~67)による。
- 6) 合拗音の成立に関しては小倉肇「合拗音の生成過程について」(『国語学』124集1981)に論があるが、これに関して、服部四郎の comment (月刊『言語』vol. 12 No. 3 p.123, 1983)がある。
- 7) 有坂秀世「漢字の朝鮮音について」(1936、『国語音韻史の研究』所収)なお、有坂『上代音韻攷』(1955) p.p.267~269に挙げられた大矢透『隋唐音図』第11転の歯音二等は、漢音を「シヨ」、呉音を「ソ」としており、文献上の事実と一致しない。
- 8) 河野六郎『朝鮮漢字音の研究』の「資料音韻表」による。
- 9) 有坂秀世『上代音韻攷』p.p.241~269
- 10) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(1982)、高松政雄「中古呉音」

(1973、『日本漢字音の研究』所収)にも触れるところがある。

- 11) 朝鮮字音でも「即」「息」「側」など、母音を *w* としたり *i* としたりする場合があつて一定せず、日本呉音との対応関係も見出し難い。
- 12) 高松 (1973)、河野「『日本呉音』に就いて」(1976、『河野六郎著作集』2 所収) など。
- 13) 沼本 (1982) p.p.562~564。
- 14) 坂井健一『魏晋南北朝字音研究』(1975)。
- 15) むしろ、朝鮮字音で蟹撮合口の舌音(一等)が一般に母音 *o* を有するのに対し、「対」「隊」「内」などの母音は *e* を示す点が注目される。ただしこの場合、円唇性の有無あるいは強弱において、日本呉音とちょうど逆の関係にある点が問題である。
- 16) 「狂」などの字音については、高松に「『狂』の字音」(1976、『日本漢字音の研究』所収)がある。
- 17) 有坂「唇牙喉音四等字に於ける合口性の弱化傾向について」(1940、『国語音韻史の研究』所収)
- 18) 沼本 (1982) p.p.556~557に「龍」を一等とするは誤り。
- 19) 有坂「カールグレン氏の拗音説を評す」(1937~1939、『国語音韻史の研究』所収)
- 20) 河野「朝鮮漢字音と日本呉音」(1978、『河野六郎著作集』3 所収)